



①・②・③前日に仕掛けられた地引網「地獄あみ」をみんなで引き上げ。立派なウナギやスズキ、ハゼなどを収穫。④淀川のしじみはべっ甲色をしていることから、「なにわべっこうしじみ」と呼ばれています。⑤昼食はしじみ汁を堪能。⑥子どもたちがたくさん参加。⑦踊りでイベントを盛り上げてくれたのは「大阪メチャハッピー祭」の皆さん。⑧ご近所から参加の山守貞之さん親子。⑨イベントが行われた新淀川河川敷。正面の高層ビルは大阪駅周辺。



大阪湾再生への想いを 共有する淀川しじみ獲り



大阪府大阪市
7月7日（日）、よみがえれ森・川・海大阪実行委員会（愛称・ちやぶ台会議）が主催して、大阪・淀川の河口に近い新淀川河川敷で開かれた「しじみ獲り」イベントは今年で10回目。地域の皆さんに、淀川で楽しい思い出をつくってもらいたいという想いがあります。

地元の塚本にお住まいの山守貞之さん親子は、上の娘さんが小学校でイベントのチラシをもらってきて、「どうしても行きたい！」ということで今年初めて参加しました。EMのことは、

幼稚園の頃にEM活性液をもらっていたので知っていました。しじみ獲りを楽しんでいるとはいえ、お父さんの淀川に対するイメージは、「僕たちの世代は、淀川の一番汚い時期を知っているから、どうしても、ヘドロ臭い川という印象が消えません」。しじみ獲りの体験によって、今の子どもたちには「きれいな川になっていく淀川」という記憶が残るかもしれません。

一方で、「きれいな海と豊かな海は違う」と、大阪湾の貧栄養化を危惧するのは漁師の皆さん。淀川のしじみ収穫量は平成17年～18年にかけて、主催者の一員である大阪市漁協による大規模EM浄化運動によって3倍にまで増加しましたが、その後、EMの大量投入ができなかったことで、貝毒の発生が重なったことで、ここ数年は低調で、収穫量は横ばいの状態です。理想どおりのEM浄化活動ができない悩みがありますが、「いつかは結果が出ることは分かっている」「やり続けられれば、どこでどんな縁があるかわからない」と、粘り強く挑戦し続けています。



海の日を控えた7月6日、道頓堀川の水辺に、老若男女が集結。

世代を超えて 拡がっていく道頓堀 クリーンアップ大作戦

大阪府大阪市



大阪市鶴見区にある大阪府立茨田高校の元校長の中村さんは、以前に水辺地権者会の皆さんと知り合い、会の活動に教育に役立つイベントをコラボレーションすれば、心の清らかな子ども達に育てることができると思ったそうです。かつての教え子達と今回のイベントを楽しんでおられました。



NPO法人道頓堀水辺地権者会が主催して、全国理美容団体SPC JAPAN地球環境部関西統括本部が中心となって、EM活性液とEM団子の道頓堀川への投入活動を行いました。

この日は、「大阪リバーツーリング道頓堀クリーンアップ」の一環として、清掃活動とSPC JAPANが用意したEM団子5000個とEM活性液1900リットルの投入がメインでした。

今回のEM活性液はSPC関西統括本部がEM拡大培養機やタンクを使って道頓堀川用に準備したものと、北陸のSPC JAPANのメンバーが持参したものです。

年4回の投入予定で、すでに4月一回目が済んで、今回7月6日は二回目でした。三回目は10月を予定しています。

この日は朝から快晴。さすが比嘉照夫教授が参加する日はいつも天気に恵まれます。比嘉教授は現地に着くなり、道頓堀川のリバーウォークを歩いて、道頓堀川の臭いが全くない状態をチェックし、この状態はEMが効いていると主催者に話しておられました。

SPC関西統括本部では4年前に道頓堀川にEMを入れたと模索する中、水辺地権者会との出会いと協力が功を奏し、大阪市の前市長にお願いしたところ、許可を得て、EMの投入にこぎつきました。3年前、観光船が道頓堀川に就航した当初は臭いがひどかったそうですが、EMを投入したら臭いがなくなつたので、SPCのメンバーはもちろん、イベント主催者の水辺地権者会の方もEMの効果を実感したそうです。